











# 箱庭療法

箱庭療法は、1929年にロンドンの小児科女医、ローウェンフェルトが「ワールドテックニック」として創始し、スイスのカルプ女史が育てた技法です。元文化庁長官の河合隼雄が日本に導入し、世界の中でも日本で最も活発に用いられています。



四角の砂箱に様々なアイテムを置いていくことで、自然治癒力を引き出すとされています。イメージワークの範疇に入ると考えられますが、種々のアイテムや砂など、具体的な「モノ」が介在するところが特徴です。また、アイテムについては、治療者が揃えたいわば「ありあわせ」のものを用いて表現するところも特徴の一つです。そのため、絵を描くのは苦手という人でも、比較的抵抗感が少なく手を出しやすいと言われています。

箱庭療法は、一見すると心理テストのようにも見えますが、そうではなく、継続的な面接の中で何回も作るのが通常のやり方です。治療者は、一連の箱庭の背景に流れるテーマを読み取ることができる必要がありますが、その内容を解釈として伝えると、自然な流れを妨げると考えられることから、一般的には解釈的な説明は避けることが多くなっています。




